

本学保育科生の入学試験の成績と短大での成績の関係： 1983－1987年度卒業生について（I）

中 居 伊久緒

高校時代の進路選択，入学試験，短大生活を切り離さず一連の深く関わり合う過程としてとらえ，中居（1984 a）はその流れの中の関門である入試の成績と短大での成績に注目して平安女学院短期大学保育科生の進学適性について考察した。具体的な手続としては，1982（昭和57）年度保育科卒業生の高校3年間の成績（以後「高校成績」），入試の学科試験成績（以後「入試学科成績」），これら2つの合計点であり合否判定の資料となる入学試験成績（以後「入試成績」），および短大2年間の成績（以後「短大成績」）の関係を相関係数を求めて検討したのである。その結果，高校成績と入学試験の必須科目である現代国語の間に統計的に有意な負の相関，また高校成績と短大成績の間に有意な正の相関，がおのおの認められた。すなわち，短大成績の高低は，一方で高校成績の高低と非常に強い相関関係にあったが，他方入試成績の高低とは明らかな関連はなかったのである。

この高校成績と入試学科成績と短大成績の三者の関係と同様の現象が烏野（1983），小高（1987），および三木（1987）などで報告されており，先に述べた中居（1984 a）で見られた三者の関係は本学保育科に特異なものではないようである。しかし，中居（1984a）はただ1年度の保育科生に初めて分析して得られた現象であったため，それは1982年度の保育科卒業生に偶発的に生じたものと言えなくもない。そこで本研究では，その後の5年度の保育科卒業生の高校成績，入試学科成績，この2つの合計である入試成績，および短大成績の関係を明らかにするために，以前と同様の方法で分析する。さらに今回は短大成績の上位者について同じく相関係数を求め，何らかの特徴をつかみたいと考えている。

言うまでもなく相関係数は2つの事柄の関係を表わすものであるが，その2つの事柄の因果関係を示すものではない。したがって2つの事柄，たとえば高校成

績と短大成績の間に統計的に有意な正の相関が見られたとしても，一方がもう一方の原因であるとは言えない。ただし上の例の場合の2つの成績の間に比較的永続して高い正の相関が認められるなら，かなり高い確率で高校成績から短大成績を予測することができると言える。

さて本研究の目的は，5年度にわたる本学保育科卒業生の高校成績，入試学科成績，入試成績，および短大成績の関係を把握することであり，その資料をもとに本学保育科の入試制度の今後について考察することである。

方 法

平安女学院短期大学保育科の1983（昭和58）年度から1987（昭和62）年度までの卒業生の高校成績，入試学科成績，入試成績，および短大成績の間の相関係数を各年度別に求めた。ただし，併設高校からの特別推薦による入学者と卒業延期者や中途退学者をはぶいた。

表1は1983年度から1987年度までの保育科卒業生が入試で受験した必須科目と選択科目，それに加えて内申点の配点である。この表1には示していないが，必須科目として全受験生が音楽を受験する。この音楽の試験は簡単なメロディーを初見で伴奏なしで歌うものである。入試成績として点数化されないが合否判定の基準とされる。高校成績である内申点は受験出願時に提出された調査書の評定平均値の平均を10倍した値である。必須科目と選択科目は高等学校学習指導要領の改訂に合わせて1986年度卒業生の受験時より変わって来ているが，本研究では現代国語と国語Ⅰ・国語Ⅱを「入試国語」，英語Bまたは倫理・社会と英語Ⅰ・英語Ⅱまたは現代社会を「入試選択」と称する。受験者は以上の入試国語の点数（以後「入試国語成績」）と

表 1. 1983—1987年度卒業生の入試受験科目（配点）

卒業年度	1983	1984	1985	1986	1987
必須科目 (100)	現代国語	現代国語	現代国語	国語Ⅰ・Ⅱ	国語Ⅰ・Ⅱ
選択科目 (50)	英語 B または 倫理・社会	英語 B または 倫理・社会	英語 B または 倫理・社会	英語Ⅰ・Ⅱ または 現代社会	英語Ⅰ・Ⅱ または 現代社会
内申点 (50)					

入試選択の点数（以後「入試選択成績」）と内申点の総合点で合否を判定される。短大成績は2年間に単位修得したすべての科目の点数の平均値である。

短大成績上位者の分析の際には2年間の全科目の点数の平均値が80.0以上の者を取り出し、各年度別に相関係数を求めた。

結果と考察

表 2 は1983年度から1987年度までの本学保育科卒業生の高校成績、入試学科成績、これらを合計した入試

成績、および短大成績の平均値である。表 3 はそれらの相関係数である。

表 2 を見ると1986、1987年度卒業生の入試国語成績と入試選択成績がそれ以前の3年度の卒業生の値と比較するとかなり低く、それゆえ当然のことながら入試成績の値も低い。くしくも1986年度卒業生から入試科目の名称が変更されたのであるが、高校成績と短大成績の値は5年度にわたりほぼ等しく、とりわけ短大成績は驚くほど小さなバラツキしか示していない。これら5年度の本学保育科卒業生は学業面で著しく異なるとは考えられない。おそらくは1986、1987年度卒業生

表 2. 1983—1987年度卒業生の高校成績、入試学科成績、入試成績、および短大成績の平均

卒業年度	1983 (N=106)	1984 (N=102)	1985 (N=95)	1986 (N=99)	1987 (N=74)
高校成績	39.2	38.5	38.3	37.8	39.4
入試国語成績	67.6	73.1	75.3	51.1	53.6
入試選択成績	36.8	29.4	32.7	27.9	25.9
入試学科成績	104.4	102.5	108.0	79.0	79.5
入試成績	143.7	141.0	146.3	116.8	119.0
短大成績	77.3	77.4	77.1	77.7	77.6

表 3. 各年度卒業生の高校成績、入試学科成績、入試成績、および短大成績の間の相関

卒業年度	1983	1984	1985	1986	1987
高校成績と入試国語成績	-.215*	-.333***	-.184	-.247*	-.360**
高校成績と入試選択成績	-.180	-.181	-.182	-.098	-.232*
高校成績と入試学科成績	-.319**	-.431**	-.325**	-.282**	-.554***
高校成績と短大成績	.295**	.313**	.205*	.391***	.263*
入試国語成績と短大成績	.008	-.205*	.060	-.104	-.107
入試選択成績と短大成績	.095	.021	.004	-.068	-.017
入試学科成績と短大成績	.082	-.179	.061	-.139	-.116
入試成績と短大成績	.233*	.003	.186	.077	.050

*P<.05、**P<.01、***P<.001

の入試時に出題された問題の性格による違いであろう。

表3でまず注目されるのは、5年度を通じて高校成績と短大成績の間には一貫して統計的に有意な正の相関があり、高校成績と入試学科成績の間には有意な負の相関があった点である。すなわち高校成績が高かった者は入試学科成績は低い、短大成績は高く、反対に高校成績が低かった者は入試学科成績は高い、短大成績は低いのである。これに中居(1984 a)の結果を加えると、1982年度卒業生以来6年度連続して高校成績と入試学科成績と短大成績の間には、方向は異なるものの非常に強い関連が認められたこととなる。その他には、1983年度卒業生の入試成績と短大成績の間には統計的に有意な正の相関があったが、1985年度卒業

卒業生の値と比べて低いことは表2と同様である。これら2年度の短大成績80.0点以上の人数は20名と23名であり、それ以前の年度と比較して学業成績の面では少しも遜色はうかがえない。さて、この表4の短大成績上位者の高校成績と入試成績の値は表2のそれぞれの値よりも高く、当然のことながら短大成績の値も高い。しかし、表4の中でイタリックで示した1984、1985年度の入試国語成績、1983、1986、1987年度の入試選択成績、そして1984、1986、1987年度の入試学科成績の値は表2のそれぞれの値よりもごくわずかではあるが低い。すなわち、5年度とも短大成績上位者は入試国語成績か入試選択成績が卒業生全体のそれらの平均値よりも低かったのである。これは表3の短大成績と入試国語成績や入試選択成績や入試学科成績の間

表4. 1983—1987年度卒業生のうちの短大成績上位者の高校成績、入試学科成績、入試成績、および短大成績の平均

卒業年度	1983 (N=21)	1984 (N=21)	1985 (N=16)	1986 (N=20)	1987 (N=23)
高校成績	41.1	40.6	39.8	40.4	40.7
入試国語成績	69.0	71.0	74.8	51.5	53.0
入試選択成績	36.6	31.2	34.6	26.2	25.6
入試学科成績	105.5	102.2	109.4	77.7	78.6
入試成績	146.6	142.9	149.2	118.0	119.3
短大成績	81.5	81.7	81.7	82.2	81.2

生を除く4年度の卒業生の高校成績と入試国語成績の間には有意な負の相関、1987年度卒業生の高校成績と入試選択成績の間にも有意な負の相関があった。以上の結果をまとめると次の通りである。高校時代の成績の高低は、入試の学科試験の成績の高低とは逆方向に強く関連しており、短大での成績の高低とは同一方向に強く関連している。さらに、高校時代の成績と入試の学科試験の成績を合計した入試の成績の高低と短大での成績の高低とは必ずしも対応するような関係にはない。こういった高校成績と入試学科成績と短大成績の三者の関係は、烏野(1983)、小高(1987)および三木(1987)が報告した結果と同じである。

表4は1983年度から1987年度までの保育科卒業生の中で短大成績が80.0点以上の者の高校成績、入試学科成績、入試成績、および短大成績の平均値である。表5はそれらの相関係数である。

表4の中の高校成績の値と短大成績の値のバラツキが5年度にわたって非常に小さいことと、1986、1987年度卒業生の入試学科成績の値がそれ以前の3年度の

に有意な正の相関が見られなかったことと合致する。もしも成績至上主義の立場に立ってがむしゃらに短大成績の高い卒業生を送り出すことにこだわるなら、高校の内申点が高くて入試学科試験の成績がやや低い受験生を選抜すればよさそうである。この件については後に詳しく検討する。

表5は先の表3とはずいぶん様子が異なっている。統計的に有意な正の相関が1984、1986年度卒業生の高校成績と短大成績の間、1987年度の入試学科成績と短大成績の間、さらに1985、1987年度の入試成績と短大成績の間にあった。また有意な負の相関が1987年度の高校成績と入試国語成績の間、1984年度の高校成績と入試選択成績の間、1984、1987年度の高校成績と入試学科成績の間、さらに1984年度の入試学科成績と短大成績の間にあった。このように5年度を通じて、正・負を問わず一貫した強い関連はいずれの成績同士の間にも見られず、明らかな特徴は認められない。

これまでの結果を要約すると以下の通りである。まず、高校時代の成績と短大での成績は非常に強い関連

表 5. 各年度卒業生のうちの短大成績上位者の高校成績、入試学科成績、入試成績、および短大成績の間の相関

卒業年度	1983	1984	1985	1986	1987
高校成績と入試国語成績	-.210	-.323	-.106	.256	-.434*
高校入試と入試選択成績	.162	-.467*	.018	.058	-.216
高校成績と入試学科成績	-.020	-.486*	-.103	-.151	-.499*
高校成績と短大成績	.155	.438*	.401	.667**	-.168
入試国語成績と短大成績	.013	-.392	.299	-.074	.203
入試選択成績と短大成績	.202	-.373	.017	.111	.400
入試学科成績と短大成績	.161	-.505*	.324	.014	.480*
入試成績と短大成績	.209	-.306	.524*	.313	.477*

*P<.05、**P<.01

を持っている。概して言うなら、高校で高い成績を取った者の入試における学科試験の成績はほんのわずかに平均値を下回る低さであるが短大での成績は高い。反対に、高校の成績が低かった者は入試の学科試験の成績は高いが短大では低い成績しか取っていない。そして最後に、短大での2年間の成績と入試の学科試験の成績の間や入試の成績の間にはこれと違って明らかな関連はないようである。

以上の結果にもとづき、本学保育科の今後の入試制度のあり方に関する論議に移る。

まず先に少し触れた件から検討を始めることにする。本学保育科の現行の入試制度の中ですぐれた卒業生を世に送り出すことを最大目標とするなら、入学者を選抜する時に次のような方法を採用することである。すなわち、高校成績は高く入試学科成績は入学者全体の平均よりも少し低い受験生を、入試成績の高い者よりも優先的に合格させるのである。ただし、ここで言うすぐれた卒業生とはあくまでも短大成績の高い者の意味である。また本学の併設高校からの特別推せんのように、入試の学科試験を受けずに入学する者には入試学科成績が存在しないのでこの方法を適用することはできない。このようにして入学者を選抜すれば、入学して本学保育科生となった者は高い成績を取って卒業することが期待できる。すぐれた卒業生を送り出す目標にこれまでよりは近づくことになるはずである。しかし、実際問題として考えればどうだろう。表4が示すように、短大成績上位者の入試学科成績が低いのは事実だが、その値と全体の平均値の間の差はごくわずかである。まだ入学者さえ確定していない合格判定の時点で入学者の入試学科成績の平均値を判読するなど至難の技である。これの一段階前の合格者の歩留り率を予測することに毎年苦労しているのである

から。そして、入試成績の上位から順に合格者を決定する目下的方法を中止するならともかく、短大の許容量をはるかに上回る数の入学者を受け入れなければならない事態を招くおそれもある。こう考えてくると、どうも現実的な方策ではない。

それよりは実施できる可能性の高い方法が入試学科試験と内申点の配点の変更である。現在のところ保育科の配点は表1に示した通りで、これは1982年度卒業生の入試以来変わっていない。そこで、高校成績である内申点の比率を現行の50/200よりも高くするのである。そうすれば短大成績の高い保育科生をより多く卒業させることができる。なぜなら、この方法を採用することによって受験生全体の中における高校成績の高い者の数が合格者数の内に占める割合は高くなるからである。言い換えると、内申点の高い者ほど入試成績は上位に位置し、合格する可能性が高まり、これまでよりも一層多くの者が高校成績のおかげで入学するわけである。そうすると、すでに述べてきた通り高校成績と短大成績が同じ方向に強く対応する傾向があるのだから、保育科卒業生全体として短大成績の上昇が十分見込めるのである。しかし、内申点の重視がいわゆる高校の進学予備校化に拍車をかけるおそれがないことを確信する場合にのみ採用すべきである。それは、短大生活を次のステップへの単なる手段としてしか受け止めない短大の就職予備校化を歓迎できないのと同じ理由からである。それに、内申点にはいわゆる学校差の問題もある。中居(1984 a)も本研究も調査書に記載された評定平均値の平均の10倍をそのまま高校成績と見なしてきた。全国の国・公・私立高校の成績をすべて同じように扱うことが妥当なのかどうか。これは重大なポイントである。別の機会においてアプローチしたい課題である。

さて、実を言うところまでは高校成績、入試学科成績、短大成績が高いことは良いこと、そしてそれぞれの成績同士の間には高い正の相関関係があるべき、という前提のもとづく論議であった。一般論としてもいづれの成績にしる低いことが良いとは考えられないが、とりわけ短大に入学しなくては短大成績を収めることができないので、高校成績と入試学科成績は短大への合格を条件とするならそうあるべきである。しかし、である。その前提からしばしば、そしていともたやすく導かれるのが“短大成績の高い者イコール良き保育者”というあのまことしやかな図式である。本当にそうであろうか。次はこの件について検討する。

入試は本学保育科の教育課程を習得できる学力、つまり保育の担い手としての実力を身につける可能性、の高い者を選抜するために実施する。したがって、入試の学科試験の成績にはその学力、可能性を測定した値が表わされねばならない。ところが実際はと言えば、すでに繰り返し述べたように入試学科成績は短大成績との間には相関がなく、高校成績との間にいたっては負の相関がある。この事態を受け止めようとする時、桑・丹羽・田中（1987）、中居（1984 b）が有益な示唆を与えてくれる。

因子分析の手法を用いて保育者の理想像・現実像を決定する要因を調べた桑他（1987）によれば、保育者養成校の教員が保育者の理想像を描く場合、心身の健康、責任感・情緒安定性・創造性、表現力、幼児理解・指導力を特に重視するという。ところがこれらの中で教育の過程において習得可能なものは表現力、幼児理解・指導力ぐらいのものである。それゆえ、成績はそういった力がどの程度養われ、発揮できるかという観点から評価される。だが知識を増す意味での理解力は別として、表現力や指導力を測定し成績評価することは決して容易なことではない。測るべきものを偏りなく、しかも歪みなく測れるだろうか。まして、それらの力を短大での教育過程において獲得するであろう可能性を的確に測定できる入試科目は、如何せん、高等学校学習指導要領の中には見い出せない。さらにまた、母親は心身が健康で知的理解・対応力や創造性に富み論理的思考ができ対人関係処理能力がすぐれていることを、保育者自身は意欲的で快活で協調性があることを、望ましい保育者像として描くという。つまり理想的な保育者像、保育の担い手のあるべき姿というのは、誰から見て、あるいはまた誰にとって、によりかなり違うのである。保育科生が抱く理想的保育者像が明らかにされていないが、あの“短大成績上位者

イコール良い保育者”の図式は成立しそうにない。

数量化第Ⅱ類を用いた中居（1984 b）によると、卒業時に本学学生が2年間の短大生活を満足と判定する際の主な要因は志望動機、専門的知識・技能の習得、友人や教師との人間的な接触である。明確な志望動機を持たずとも高い入試学科成績を収めることはできる。友人や教師との間にふれあいのない短大生活は不満足と感じられる。入試学科成績が高くても、それらを始めとする様々な事情により入学後の学習への動機づけが低ければ、高い短大成績は期待できない。

さて、このように考えてくると、短大での学習への動機づけ、成績評価、理想的な保育者像などの面でまだまだ検討と改善の余地がある。この時点において、高校成績が短大成績と強く相関していることや入試学科成績が短大成績と関連していないことを理由にして入試制度の見直しと称して行なう入試科目やその配点の変更には疑問を感じる。そういった小手先の操作からは弊害をもたらすおそれすらあることはすでに述べた通りである。つまり、現行の本学保育科の入試制度が最良とは言い難いが、時代背景の中で変動する保育の担い手の理想像を見極めることに努力を惜しまぬこと、そしてそれと同時にその理想的な保育者像により一層近づける資質を持った入学者の選抜方法を探っていくこと、これ以外に道はないと考えられる。

参考文献

- 鳥野博文 1983 保母養成の研究—入学試験と学業成績の関連について 全国保母養成協議会第22回研究大会発表論文集, 38-39。
- 小高普二 1987 入試成績の追跡研究(5) 跡見学園短期大学紀要, 24, 25-40。
- 桑幸男・丹羽孝・田中俊也 1987 母親・保育者・大学教員のみた保育者像についての因子分析的研究 保育学年報, 25, 16-28。
- 三木知子 1987 入学試験成績と学業成績との関係(Ⅱ) 頌栄短期大学研究紀要, 19, 33-46。
- 中居伊久緒 1984 a 入学試験の成績と短大での成績にもとづく本学保育科生の進学適性—1981度入学生を対象として— 平安女学院短期大学保育研究, 12, 25-29。
- 中居伊久緒 1984 b 本学学生の短大生活における満足—不満足—の要因の分析: 「特推」と「入試」についての比較検討— 平安女学院短期大学紀要, 15, 82-90。